

森鷗外という経験

小堀桂一郎著『森鷗外』

——日本はまだ普請中だ——

（ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、
二〇一三年一月、xviii+712+21頁）

稲賀 繁美

生誕百五十周年、歿後九十周年の節目の年に刊行された評伝である。本文六百七十七頁、全体で七百三十頁を越える大著だが、重厚ながら流麗な筆捌ぎに、つい釣り込まれ、一気に読了した。筆力というほかに形容を思いつかない。終章は就中、圧巻といえよう。鷗外が陸軍という巨大組織における軍医総監という最高位で、官職を辞したのは五十五歳。「妄想」執筆の年齢から数えてさらに数年、人生の「なかじぎり」と自覚している。偶々その同年齢を迎えた評者は、一読者として歴史を振り返り、我が身の今後を慮る恰好の便を得たことになる。聊か私事にわたるが、書評の性格にも影響する不可避の経緯として一言注記する。

森鷗外は一九二三年九月三日の関東大震災を知らぬまま、その前年の一九二二年七月九日に歿している。鷗外という経験を現代は、そして後世はいかに受け継ぐことができるのだろうか。国語教科書から鷗外が消滅して久しい。幼年期から青春時代に鷗外を繙読する体験は、もはや若い世代では死滅しかかつてい

る。著者はどのあたりの読者層を標的として想定されたのだろうか。本書は今後いかに読み継がれるべきなのか。

津和野という山陰の辺鄙な小藩の出身者。現在から遡るそうした先入主は、百五十年前以前の環境とは大きく隔っている。藩主の才覚、大國隆正（二七九二—一八七二年）という国学者の存在、欧州留学の先達としての西周（二八二九—一九七七年）の東京での薫陶。縁談を巡っての両者の懸隔。年齢を二歳偽り、十三で東京医学学校予科に入学した早熟の秀才。その陸軍入りの裏には、反りの合わぬ「偏狭」（四〇頁）なドイツ人教師シュルツェ Wilhelm Schultze の低い評定があった。文部省経路で出世したなら、いかに異なる将来が開けていたことか。森は二十一歳で陸軍の命により欧州留学に旅立つ。

留学時点で鷗外のドイツ語の基礎はすでに充分であり、ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘンと、滞在先で魚の水を得たごとき活躍が始まる。著者の琴線に触れるのは、若き鷗外の潑刺たる姿である。ベルリンの軍医学会総会では、日本に医学学校を創設するに尽くしたレオポルト・ミュラー Benjamin Carl Leopold Müller（一八二二—一九三年）が、鷗外の演説に自分の撒いた種の最良の発芽を見て「得意の色を顯し」（三五頁）た。また国際赤十字会議で事実上の日本代表として発言し、赤十字はひとり白人国の占有ではなく、日本に先駆的な実績あることを知らしめて「面目を天下に示し」（二五七頁）た。国家の榮譽に貢献した通訳・森の晴れがましい姿である。比較も憚られるが、似たような経験を有する者には、聊かこそばゆかろう。北清事変での日本陸軍の卓越した軍規や、日露戦争時の森自身の国際

赤十字要員への周到な配慮といった事績との脈絡も、おのずと想起される。問題なのは、もはや今日この国にそうした自民族への矜持や国際的責任意識など、政界にも実業界にも皆無、という現実だろう。

ナウマン Edmund Naumann (一八五四—一九二七年) の日本蔑視に侮辱を感じた森は、ドイツの新聞紙上で論争を挑む。その論争の内容に本書は深入りしない。その代わりに、出世の途を阻まれたナウマンの不幸な履歴に触れる。蒸気船の運転を始めたのはよいが、その止め方を知らぬ、というナウマンの開化日本批判は、私見では、まだ普請中(四二頁)の日本という鷗外後年の述懐とも矛盾はすまい。黄禍と白禍との衝突という図式がアジア近現代史を否応なく方向づけた。件の諍いは、その裏地を如実に示す思想上の前哨戦であり、帝国主義覇権闘争の縮図だった。

本書は文人・森の評伝であることのみを目指すものではない。あくまで職業軍人であり、高級官僚であり軍医であった人物を通して、明治の精神史を描こうとする。ドイツ留学中の論文もふくめ、森の医学上の貢献にも詳細な情報を提供する。脚氣に対する森の対応が、当然ながら話題に上る。日清戦争でその対応に失敗した陸軍は、日露戦争でも同じ轍を踏むが、その組織上の責任は大きく森の双肩に掛かっていた。経験主義的には海軍が小麦の使用で脚氣予防に成果をあげていた。だが森は因果立証の不備ゆえ、栄養障害説を採らず米食に固執した。その学説的敗退は明治末年までには明白になっていた(鈴木梅太郎(一八七四—一九四三年)の「オリザニン」抽出は明治四十三年)。だが、

読者を想定したものとなる。著者と鷗外「秀逸物」について架空の会話を交わせる程の教養ある読者に幸いあれ。「これはまあ評傳作者のいい気な想像」(四四三頁)と記しつつも、鷗外が「かのやうに止観」を援用し、米麦混合給食に脚氣の病原抑止成分の含有可能性を想定しえなかつたことを著者は惜しむ。衛生学者としての森の最大の業績は『衛生新篇』の編著と改版事業だろう。明治三十年に小池正直(一八五四—一九一四年)との共撰で上梓された初版は九百四十頁あまり、それが大正三年の第五版(四八八頁に「第三版」とあるのは誤植)では千八百三十頁に増大したという。著者はここで三度「脚氣」記述のうえで看過できぬ疎漏を指摘する。

以上、概ね第六章までを漫然と評してきたが、通読して付箋が急増したのは、続く最後の二章である。翻訳文学については、芥川龍之介(一八九二—一九二七年)に劣らず、佐藤亜紀(一九六二年生)の『バルタザールの遍歴——Et in Arcadia ego』(新潮社、一九九一年十二月)も、アンリ・ド・リエ Henri de Regnier (一八六四—一九三六年)の鷗外重訳「復讐」Balthasar Aldamin (『諸國物語』(國民文庫刊行會、大正四年一月)所収)に負っている形跡に気づいたことのみ報告して、以下省略に従う。また「寒山拾得縁起」の結び、「實は、パアも文殊なのだが、まだ誰も拜みに来ないのだよ」といった戯論への貴重な言及や(五六六頁)、筆者ならではの寸評は、いまま少し随所で敷衍・奮発いただけただら、と惜しまれる。以下、森の漢文的教養と時局との関連、晩年の森の国家経綸、歴史物と病蹟の三点のみに限定して、若干の考察を加えたい。

著者が坂内正「鷗外最大の悲劇」(新潮社、二〇〇一年五月)に依拠して論ずるところによれば、問題の核心はそこにはない。問題なのは、日清・日露戦争の傷病兵統計に脚氣が立項されず、「平病」(三〇頁)に混載された事実である。「軍隊内の多数の生命と、従つて一國の兵力量の消長がかかってくる」点に「大問題」を見る(三三〇頁)のが著者の視点である。ちなみに、「統計」といい「情報」といい、(別の見解もあるが、著者によれば)どちらも森の提唱した訳語とのこと。評者としてさらなる疑問を述べらるならば、日露戦争「勝利」の論功行賞により、大きく変質を遂げたとされる陸軍の組織的体質と、森自身の栄達との相関はいかなるものだったのか。脱落者・夭折者の悲劇は耳目に触れやすいが、昇進の履歴は組織原理に埋没しがちである。責任追及は困難とする著者の評定は、やや現在の官僚組織の通弊(丸山真男用語でいう「無責任体制」に通じる)を日露戦後体制へと適及する傾きがあるのではないか。公職の裏で文藝に手を出すことなどご法度に等しい昨今の官僚社会から見ると、時には咎めだてもありながら、最高位の高級官僚に文筆稼業も許した陸軍という組織が不思議である。

森の文学的素養と達成について、著者は当代最高にして絶後の見識の持ち主と見て語弊あるまい。鷗外が読んだドイツ語原書のみならず、その周囲まで目配りがあり、漢詩についても現在の凡百の学識を遙かに凌駕する研究者は、今後出現しまい。もつとも「森鷗外—文業解題 翻譯篇」(岩波書店、一九八二年三月)、「森鷗外—文業解題 創作篇」(岩波書店、一九八二年一月)の著述をもつ著者ゆえ、いきおい記述はこれらの著作に親しんだ

著者は陸・海大臣の現役武官任命制度を廃止した木越安綱(一八五四—一九三二年)の勇断の蔭に、クラウゼヴィッツ Karl von Clausewitz (一七八〇—一八三二年)の『戦争論』Von Kriege (一八三二年)を講読した森の姿を透視し、また対華二十一ヶ条要求に難色をしめした元勳、山縣有朋(一八三八—一九二二年)の危機意識の背後をなす「東西人種闘争」史観に、陸軍予備役編入後の森の影響力を想定する。森が山縣と接近し、あるいは大正天皇の寵遇を得たについては、漢詩の献上があった。鷗外の漢詩は大正四年から七年にかけて生涯最後の多作期を迎える。それは辛亥革命以降の文化環境ゆえの漢学復興なのか、政治状況か、それとも鷗外個人の年齢円熟によるものなのか。それらの相乗効果が浮き彫りとなるなかに、時代が蘇生してくる。

第一次世界大戦は極東に直接大きな災厄を齎すことはなかったという。だが、政治変革と経済構造に甚大な影響を与えている。著者は大正七年の米騒動と森の「金銀銅價考」(大正七年頃か)とを結びつけ、これも山縣への経済史的献策の一環ではなかったかと推測する。また同年十一月十三日の大戦の終息は、「ロシア、ドイツなど列強における君主制の崩壊として認識された。本書は森の、盟友・賀古鶴所(一八五五—一九三二年)宛書簡を、このあたりから頻繁に引用する。問題は、「普通撰擧」algemeines Wahlrechtであり、「民政主義」Demokratieである(五七七頁)。「ロシア革命進行の報道が思想界や労働界に強い刺激を與へ、その衝撃は日本人の意識の底深く内攻し(中略)爾來百年に近く、一種の精神的痼疾と化してその病的症状を發症し續ける」(五七一—七二頁)。この著者の立場は今更確認するに

及ぶまい。資本家と労働者、そして政府の関係が話題となり、労働問題に思案をめぐらす森は、共産主義には疑問を呈しながら、ある種の「國家社會主義」(五六八頁)の提唱まで私信に漏らしている。

「昭憲皇太后御稱號變更問題」さらには、良子女王に「色旨」の遺伝子が宿っている嫌疑から、皇太子妃の内定が紛糾した「宮中某重大事件」(六〇〇頁)。そこで山縣有朋の腹心として助言する役割を担った森。後者の事件で、年齢も二廻り上の長州藩出身の老権力者が舐めた失意落魄に近い経験に対して、森は人間的な同情を示した、と筆者は見る。大正中期の森の帝室への関与は、「明治の文豪」として文学史の流れのなかに森鷗外を格納しようとする観点には馴染まない。当然ながら、皇室への関与を蛇蝎視し、国家思想を忌避し、高級軍人官僚の文筆には一方的に敵意反感を示すがごときを通例とする鷗外解釈は、著者の歴史像とは背反する。

ここで歴史と個人との関わりを検討する段取りとなる。著者には「澠江拙齋」「壽阿彌の手紙」につづく「伊澤蘭軒」について持論がある。即ち、九歳年下の原勝郎(一八七二—一九二四年)は、踵を接するように京都大学の『藝文』に「東山時代に於ける一縉紳の生活」(大正六年八月—十二月)を掲載した。そこで描かれた京都の公卿、三條西實隆(一四五五—一五三七)の生活描写は「蘭軒」と方法において相通するものがある、と(六三〇頁)。さらに満四年の歳月をかけた、最後の長編と言うべき「北條霞亭」を、著者は「やがて己の死因となる病苦とひそかに戦ひながら、疲労と衰弱に堪へつつ辛うじて書き上げた」(六四四

頁)ものと形容する。霞亭(二七八〇—一八三三年)は学殖を囑望されながら、喘息と萎縮腎とから四十四歳で病歿する。病名の推測は鷗外によるものだが、この推定を下して十カ月ほど後には、鷗外自身も萎縮腎を自覚するに至る。霞亭の閑適に羨望を覚えながら、しかしその優柔不断に、鷗外は苛立たしさを隠さない。

ここに霞亭と鷗外との「晩年の對稱」(六五八頁)が浮かび上がる。そこに多田伊織氏(一九六〇年生)の仮説を導入したい。それによれば、鷗外は自身の肺結核の悪化を、世間に対して極力隠蔽し、糊塗に努めた。霞亭の萎縮腎説はそれに格好の材料を提供したのではないか、というのである。前後関係の再構成にはなお詰めを要する。だが主治医、額田晉(二八八六—一九六四年)の死亡診断が鷗外自説に沿ったものだった事実は動くまい。また多田氏によれば、世上誉れのたかい鷗外の「史伝」も、清朝考証学の立場からすれば、その典籍への参照は、手続きとしてなおきわめて不十分なものだったという。楊守敬(一八三九—一九一五年)ほかがまとめて買い取った小島寶素堂(尚質、一七九七—一八四八年)の旧蔵図書を台湾や中国本土で追跡調査しての報告である(多田伊織・武田時昌編『小島寶素堂関連資料集』(京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究所センター、二〇一二年三月)および多田伊織『小島寶素堂の終焉——小島尚綱と森鷗外』(小嶋寶素(抄)、『日本医学雑誌』第五十九卷二号、二〇一三年六月)、二四一頁に依る)。

帝国博物館総長として『帝諡考』(大正八年十月)につづき『元號考』の脱稿に最後の執念を燃やしつつづけた「公」の人と、考証

学を専門とせぬことに自覚はもちながら、学術の厳密さをも信条とし、臨時仮名遣調査委員会で自説を「陸軍省の意見」(三三八頁)として開陳した文人「学究」。現役武官内閣任命制度の廃止に加担しながら、留学中にはザクセン軍団のロオト Wilhelm August Roth(一八三三—一九二二年)軍医監に「東洋の諺に將の外にあるや君の命だに奉ぜざる所あり」(二五八頁)と、出先の独断専行の越権行為をも、状況によっては臨機応変の処置として許容されるべきを説いた若き軍医。そして先人の「史伝」に託して己が信条を披瀝するという歴史叙述に晩年の創作を賭けた歴史家。その振幅に首尾一貫した哲学を認めるには、一読者として、なお割り切れぬ歯痒さを克服できない。

留学体験と、傑出した言語運用能力、翻訳事業の社会的価値が、すっかり変質し下落した現在、鷗外に範を仰ぐ根拠も揺らいでいる。だが「伊澤蘭軒」執筆途上で北條新助(梅堂、一八〇八—一六五年)より霞亭の書簡二百通を借り受けた鷗外は、それを見事に編年に並べて見せた。その手腕を芥川龍之介は「human」、即ち人間業でない、と評したという(六四七頁)。この逸話は、歴史家の矜持を照らす。著者の師、島田謹二は、広瀬神社で武夫の未公開書簡の山が発見されたと聞くと現地に駆けつけ、その場で即座に手紙を年代別に配列したという。傍らで見守った学生の目に、それは「神業」と映じた。著者は慎みからか言及しない事績だが、ここに添え書きする。

森は小倉時代に「炭鉱王」貝嶋太助(一八四五—一九二六年)の本拠地、大之浦炭鉱を訪ねているが、池田浩士『石炭の文学史』(インパクト出版会、二〇一二年九月)が炭鉱のその後を語る。マ

クシム・ゴークキー Maksim Gor'ki(一八六八—一九三六年)のカプリ島滞在は「椋鳥通信」にも報告が散見する。鷗外も熟知するとおり、一九一〇年前後、カプリ島の一角はロシア亡命者の溜まり場となっていた。その側面照射は、田中純(一九六〇年生)の『冥府の建築家——ジルベール・クラヴェル伝』(みすず書房、二〇一二年十二月)にも辿られる。無数にあるうちのわずか二本の補助線に過ぎないが、たまたま同時期に繙読した著書との偶然の交錯として、付記しておきたい。